

## 大学生における親の期待に対する反応様式に関する研究(2)

今林 俊一\*, 迫田 孝志\*\*, 野田 百合香\*\*\*

A Study on the Reaction to Parental Expectations among Undergraduate Students(2)

Shunichi Imabayashi\*, Takashi Sakoda\*\* and Yurika Noda\*\*\*

---

本研究は、親の期待を感じていないと回答した大学生のその理由について、質的研究手法（KJ法）とテキスト分析手法（KH Coder）を用いて検討したものである。調査対象者197名の内、46名（23.4%）の回答が分析対象となった。

その結果、親の期待を感じないという理由は、質的研究手法と計量的な分析手法のいずれでも、ポジティブな理由（意志・尊重など）、ネガティブな理由（失敗・次など）、両側面を合わせ持つ中間の理由（干渉・放任・責任・全力など）の3つに分類することができた。

その背景には、現在の社会状況や子育てへの親の意識の変化、教育に対する価値観の多様化などが作用して、大学生が親の期待を感じないと回答する結果につながっていると考えられた。

Key words: [親の期待を感じていない理由] [時間的展望] [KJ法]  
[計量テキスト分析] [大学生]

---

(Received October 24, 2023)

### 問題と目的

青年期における中心的な発達課題のひとつとして、子の親からの自立があげられる。青年期における親からの期待との向き合い方について、池田（2009）は、青年後期の親の期待に対する反応様式が、親の期待に対して負担感や反発を示すのみではなく、親の期待との折り合いをつけ、自分の生き方を尊重していくことでもであると指摘している。また、河村（2003）は、「進学・学業期待」、「社会への適応期待」、「就職期待」、「従順・見栄期待」、「苦勞への報い期待」の5つの期待領域にどの程度期待されていると感じるかの認知と完全主義傾向との関連について検討し、親からの期待が高いと感じるほど完全主義傾向も高いことを明らかにしている。さらに、庄司・藤田（2000）は、親の「情緒的支持」は「自己実現」には正の影響を与える一方、「社会的評価」には負の影響を与えており、親の「情緒的支持」が子どもに対して複雑な影響を与えることを示した。このように、親の期待が子どもに与える影響については、肯定的な影響と否定的な影響の両側面のあることが指摘されており、青年が親からの期待をどのように受け止め、向き合うかということは、青年の親からの自立を考える上で重要な視点である。

---

\* 鹿児島純心女子短期大学生生活学科こども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

\*\* 鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター（〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目20番6号）

\*\*\* 元 鹿児島大学教育学部

ところで、石川(2011)は、時間的展望に他者という要因を組み込んで、過去の捉え方及び目標意識から捉える時間的展望と他者の影響の認識についての関連を検討している。その結果、①過去を否定的にとらえ、将来への希望をもてず、現在において空虚感を感じることは、他者とのかかわりの中で否定的感情を感じることに関連しているということ、②過去を受容し、現在や未来と連続するものとしてとらえることや将来に希望と目標をもつこと、現在において空虚感を感じないことは、他者との関わりから肯定的な効果を感じていることを明らかにしている。これらのことから、他者の影響の認識と時間的展望には関連があると考えられる。

また、進路選択や職業選択が身近な問題として存在している青年後期の大学生において、親との関係のあり方や親からの期待は意識されやすくなる時期である。職業選択・決定の過程では、自らの希望や価値観だけでなく、親が抱えている価値観、親の期待、あるいは評価なども影響を与えることから(長峰2003)、親からの期待とどのように向き合い自己を確立していくかは、重要な課題であると考えられる。

これらのことを踏まえて、今林・野田・迫田(2023)では、大学生における親の期待に対する反応様式について検討している。その結果、大学生の時間的展望に4つの特徴ある群を見出し、時間的展望の違いによって親の期待に対する反応様式が異なることを明らかにしている。その中で、23.4%の大学生が親の期待を「全く感じていない」と回答している。池田(2009)でも、17.6%の大学生が同様の回答をしており、親の期待を感じていない大学生が一定の割合で存在していると思われる。また、伊藤(2009)では、親に期待されないことを肯定的に認知する者、否定的に認知する者の2つのパターンが指摘されており、親の期待を感じない理由にも、ポジティブな理由とネガティブな理由があるのではないかと予想されることから、親からの期待を感じない理由を丁寧に分析する必要がある。

一方、理由を問う自由記述の文書データを分析する際には、分析者の考え方や価値観や能力に依存されやすく、また分析結果へのプロセスがわかりにくく、主観的になりやすいといった課題がある。文章データを整理、可視化する方法の一つとして、川喜田(1967)によって提唱されたKJ法がある。KJ法では、同じ意味と思われるカードを集め、そこに名前をつけて集約していく手法である。また、文章データを形態素(単語)に分解し、集計を行った数値情報から分析する計量テキスト分析がある。木野(2020)では、KH Coderを利用した分析で形態素解析により文章が単語単位に切片化されたとみなし、再構成化では頻出キーワードのリスト、階層型クラスター分析、共起ネットワークの結果から概念を集約できることを紹介している。

そこで、本研究においては、親からの期待を感じないと回答した者を対象に、その理由についてKJ法による質的な分析とKH Coderによる計量的な分析(樋口・中村・周, 2022; 牛澤, 2021)を行うとともに、時間的展望の観点からも検討することを目的とする。

## 方法

### 1. 調査対象者

大学生197名(男子79名, 女子118名, 19-23歳, 平均年齢20.17歳, SD=0.83)

調査にあたり、調査内容を説明し回答への協力を依頼すると共に、個人情報保護を遵守する

ことや分析結果の公表について了承の得られた197名が調査対象者となった。

## 2. 実施時期

2015年7月下旬～11月上旬に、質問紙調査を実施した。

## 3. 調査内容

### (1) フェイスシート

調査対象者の属性について調べるため、性別、学年、年齢について尋ねた。

### (2) 時間的展望の測定：時間的展望体験尺度（18項目5件法）

白井（1994）が作成したものをを用いた。「過去受容」（4項目）,「現在充実」（5項目）,「目標指向性」（5項目）,「希望」（4項目）の4つの下位尺度からなる。「とても当てはまる（5点）」,「どちらかといえばあてはまる（4点）」,「どちらともいえない（3点）」,「どちらかといえばあてはまらない（2点）」,「全くあてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。逆転項目については補正して得点を与えた。

### (3) 親の期待を感じる程度を尋ねる1項目（1項目4件法）

池田（2009）が作成したものをを用いた。具体的には、「あなたは、普段「こうあってほしい」あるいは「こうなってほしい」というように親から期待されているとどのくらい感じていますか」という質問に、「全く感じていない（1点）」,「どちらかといえば感じている（2点）」,「感じている（3点）」,「非常に感じている（4点）」の4件法で回答を求めた。

### (4) 親の期待を感じない理由を尋ねる自由記述

(3)の質問において、親の期待を「全く感じていない」と回答した調査対象者46名（男子23名、女子23名）に対して、期待を感じない理由についての自由記述を求めた。

## 結 果

今林・野田・迫田（2023）において、時間的展望では、未来指向性・過去受容・現在充実・現実感の4因子が抽出され、それらのクラスター分析により現在高群・無関心群・展望高群・展望低群の4群が構成されている。親の期待を感じる程度では、「非常に感じている」に13名（6.6%）,「感じている」に61名（31.0%）,「どちらかといえば感じている」に77名（39.1%）,「全く感じていない」に46名（23.4%）が回答している。時間的展望と親の期待を感じる程度の結果の詳細については、今林・野田・迫田（2023）の結果にあるTable 1～Table 4, Figure 1を参照されたい。

### 親の期待を感じていない理由について

親の期待を「全く感じていない」と回答した調査対象者46名に対して、親の期待を感じない理由についての自由記述を求め、得られた結果についてTable 1にその代表的な自由記述内容例を示す。親の期待を感じない理由について、自由記述の結果をもとに、第一著者と心理学を専攻している大学生2名の計3名でKJ法（川喜田, 1967）に基づくカテゴリー化をおこなった（Figure 1）。親の期待を感じないという理由のカテゴリー化については、「意思を尊重してくれる」,「見守ってくれる」といったポジティブな理由,「無関心で何も言われない」,「兄弟姉

Table 1 親の期待を全く感じない理由の代表的な自由記述内容例

ポジティブな理由の記述	
41	こうなってほしいと言われたことがないから。自分で決めた道でいいと言われるから。
96	親は自分がやりたいことをやればいいというスタンスで支えてくれるので、期待されていないように感じている。
138	親は自分がやりたいことをやっていいという考えだから。
148	自分のやりたいことが認められていて、応援され支えられていると感じているので、期待はあると思うが、押し付けず自分の意思が尊重されているように思うから。
146	私の意見を尊重してくれるから。
167	自分のしたいようにさせてくれているので何かを期待されているというよりはただ見守ってくれているように感じるから。
186	自分のことは自分で決めさせたり、したいこと等を応援してくれるので無理強いしたり期待したりはしないから。
202	親は自分のやりたいことや夢を尊重して応援してくれているから。
ネガティブな理由の記述	
74	親からあまり関心を持たれず、話をするのがないから。
109	何も言われないから。
135	何とかするだろうと思われている気がする。仕事についての質問をしたら返してくれる程度。☒
195	そもそも親とほとんどコミュニケーションを取っていないから。親も自分もその話を避けているから。
106	私には兄と姉がおり、父から「まず兄ちゃんを期待して、兄ちゃんが失敗したら次は姉ちゃんに期待する。その次がお前でも兄ちゃんが失敗したときの保険だから期待していない」と言われたから。
185	姉と弟の方が気になる様子。
中間の理由の記述	
68	親が自由を大切にする人だから、「こうなってほしい」と言われたことはない。
73	人は人、自分は自分というスタンスで育てられたから。
82	将来についてあまり聞かれないから。
132	自分の思うようにしろと言われていて。それで起こった責任は自分で取ること。
153	親は私が大学に行くことを支援してくれてはいるが、その後は自分の力で好きなように生きるように、親は関わらないと言われていてので期待していないと考える。
166	ある程度自由な行動を許されている。深く干渉されることがないため。

妹にしか期待していない」といったネガティブな理由、ポジティブとネガティブのどちらでもない、またどちらにも分類できない中間の理由の3つに分類された。このことから、親の期待を感じないという理由については、ポジティブな理由、ネガティブな理由、中間の理由というように、異なった理由により期待を感じていないということが明らかとなった。

樋口・中村・周 (2022) によるテキスト型データの分析方法のフリーソフトウェアである KH Coderを利用して、期待を感じない理由についての自由記述の内容から作成した共起ネットワークを Figure 2 に示した。サブグラフ検出で6つのグループが抽出されており、①「自分」「期待」「決める」などの語句から自分への親からの期待を感じることが少ないから自分で決めるグループ、②「兄」「姉」などの語句から兄弟に期待しているグループ、④「干渉」「切り開く」「行動」などの語句から干渉せず自由を認めるグループ、⑤「意志」「尊重」などの語句から本人の意志を尊重するグループ、⑥「放任」「主義」「責任」などの語句から放任主義と自己責任のグループなどが確認できた。次に、Figure 3 は、期待を感じない理由と、KJ法による3つのカテゴリーを変数として共起ネットワークを作成した結果を示したものである。ポジティブな理由として「意志」「尊重」「切り開く」などの語句、ネガティブな理由として「失敗」「次」などの語句、中間の理由として「干渉」「放任」「責任」「自由」などの語句との関連が強いこ

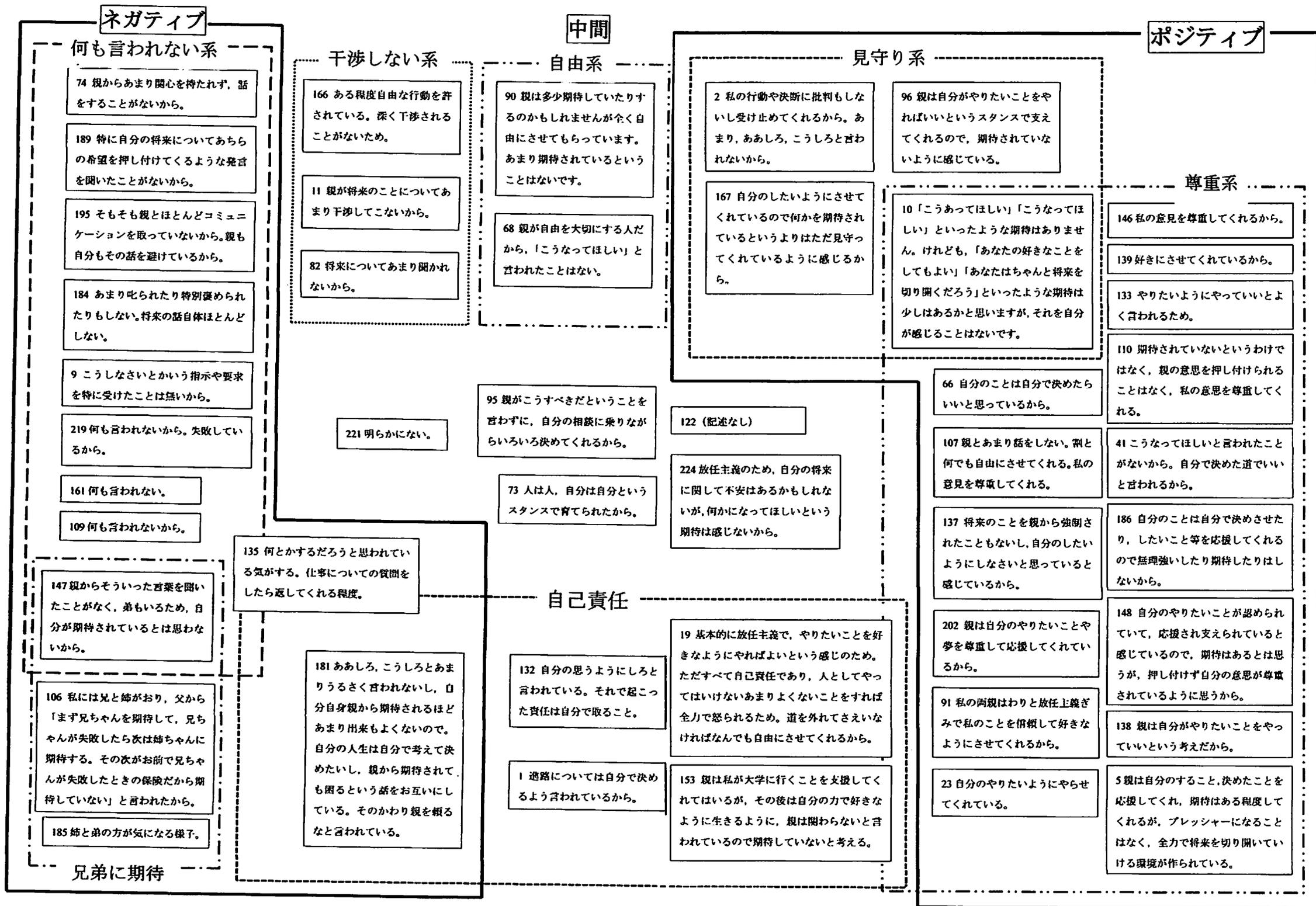


Figure 1 KJ法による親の期待を感じない理由についてのカテゴリー化

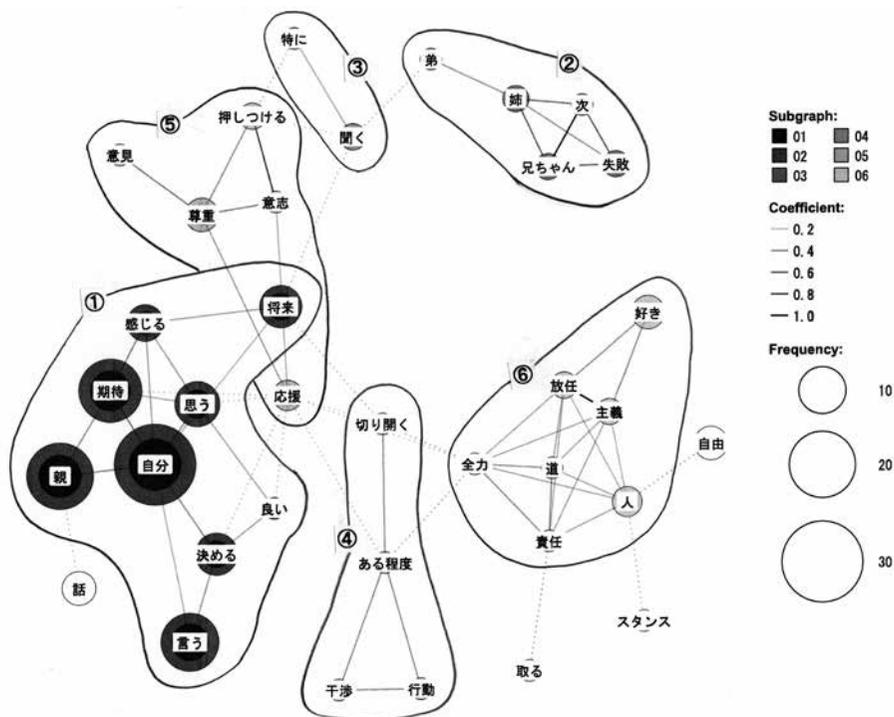


Figure 2 親の期待を感じない理由についての自由記述の共起ネットワーク

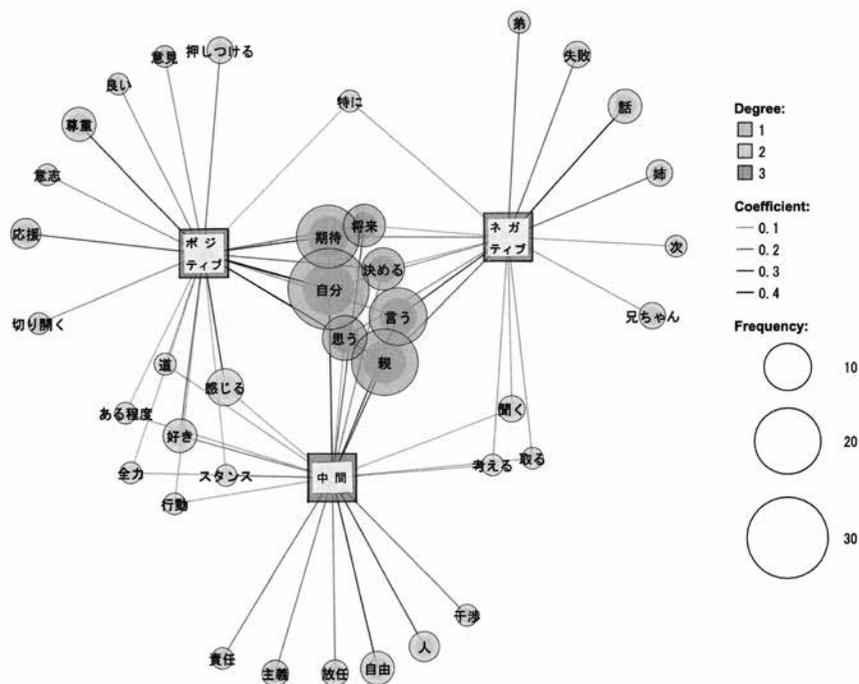


Figure 3 KJ法による親の期待を感じない3つの理由の共起ネットワーク

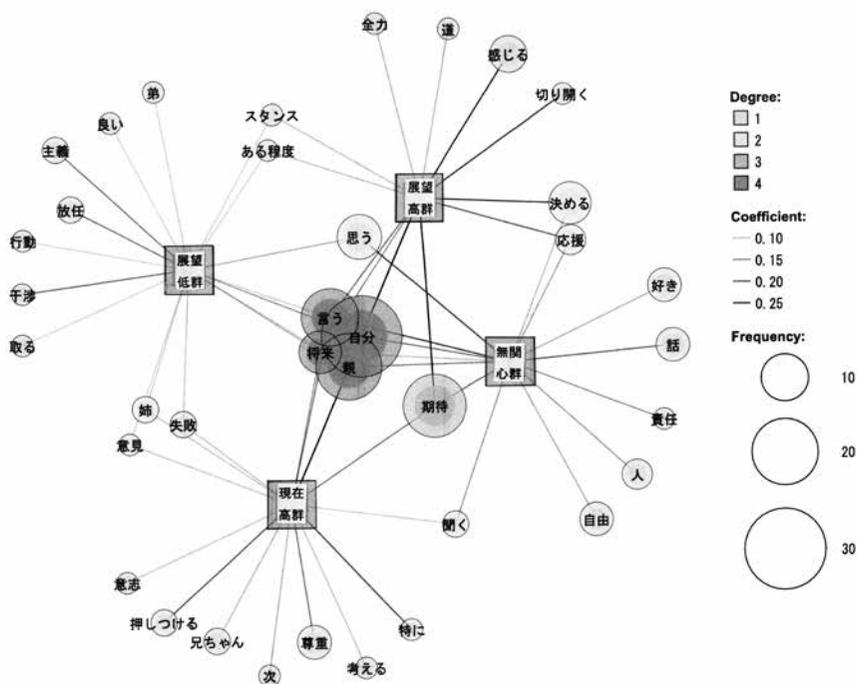


Figure 4 親の期待を感じない理由と4つの時間的展望の共起ネットワーク

とを確認できた。さらに、Figure 4は、期待を感じない理由と、時間的展望の4つのグループを変数として共起ネットワークを作成した結果を示したものである。現在高群では「意志」「尊重」などの語句、無関心群では「責任」「自由」などの語句、展望高群では「切り開く」「全力」「道」などの語句、展望低群では「干渉」「放任」「主義」などの語句との関連が強いことを確認できた。

#### 親の期待を感じない理由の自由記述についてのクロス集計

クラスター分析による時間的展望の4グループ（今林・野田・迫田, 2023）と、自由記述におけるポジティブな理由、ネガティブな理由、中間の理由の記述によるクロス集計を行い、親の期待を感じていない大学生における、期待を感じない理由についての割合を確認した（Table 2）。中間の記述については、ポジティブな理由に近いもの、ネガティブな理由に近いもの、その両方どちらにもとれるもの、特に理由を明確に示していないものなどが混在していたため、中間の記述を除き、ポジティブな記述の人数とネガティブな記述の人数について、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、展望高群においてのみ人数の差に有意な傾向が見られ（ $\chi^2(1)=3.57$ ,  $p < .10$ ）、展望高群においては、ポジティブな理由の記述の方が多い傾向にあるということが示唆された。現在高群（ $\chi^2(1)=0.50$ , n. s.）、無関心群（ $\chi^2(1)=0.11$ , n. s.）、展望低群（ $\chi^2(1)=0.50$ , n. s.）については、有意差は見られなかった。

Table 2 時間的展望の各グループにおける自由記述の分類

	1	2	3	4
	現在高群	無関心群	展望高群	展望低群
	<i>n</i> = 10	<i>n</i> = 15	<i>n</i> = 9	<i>n</i> = 12
	21.7%	32.6%	19.6%	26.1%
ポジティブ	5	5	6	3
ネガティブ	3	4	1	5
中間	2	6	2	4

## 考 察

親の期待を「全く感じていない」と回答した調査対象者の回答理由をもとに、期待を感じない理由について、Figure 1のようにKJ法（川喜田，1967）に基づきグループ化をおこなった。その結果、期待を感じないという理由には、「意思を尊重してくれる」、「見守ってくれる」といったポジティブな理由、「無関心で何も言われない」、「兄弟姉妹にしか期待していない」といったネガティブな理由、ポジティブとネガティブのどちらでもない、またはどちらにも分類できない中間の理由の3つに分類された。また、樋口・中村・周（2022）によるKH Coderを利用し期待を感じない理由について共起ネットワークを求めたところ、Figure 2のように、6つのグループが確認できた。その中で、「意志」「尊重」などのポジティブな語句群、「失敗」「次」などのネガティブな語句群、「干渉」「放任」「責任」「全力」などのポジティブとネガティブの両側面を合わせ持つ語句群のように、KJ法のグループ化と同様な語句のグループが抽出されている。さらに、KJ法による期待を感じていない3つの理由の共起ネットワークでは、Figure 3のようなネットワークが形成されており、その語句群はTable 1の3つの理由の代表的な記述やFigure 1のカテゴリー化された枠内に対応するものであった。その中で、中間的な文章内容ではFigure 3の共起ネットワークからはポジティブ、中間のどちらにも繋がっている語句が多く、ネガティブ、中間で繋がっている語句は少ないことも明らかにされた。これらのことから、親の期待を感じない理由にも、ポジティブなもの、ネガティブなもの、また、どちらでもない中間のものというように、それぞれ異なった理由があるということが明らかとなった。

伊藤（2009）では、親の期待を感じていない者について、期待されないことを肯定的に認知する者と否定的に認知する者の2つのパターンのあることが明らかにされている。この期待されないことに対するに認知の差については、本研究の質的な解釈と計量的な分析でも見出された期待を感じない理由の違いと類似しているのではないかと考えられる。また、渡部・新井（2008）によると、現代は少子化が進み、親が子どもを自分と同一化し、子どもは一心にその期待を背負わなければならないという状況がある一方で、子どもに関して無関心で全く期待をしないという親も増加しているという。このように、社会状況や子育てに対する親の意識の変化、教育に対する価値観の多様化などが親の期待を感じない者を一定数存在させる結果につながる一要因なのではないかと考えられる。また、親の期待を感じない者の理由の違いは、大学

生が他者との関係性の中で自他の差異を知り、ほどよい挫折と修復を体験する過程を反映しているとも考えられる。

さらに、どちらでもない中間の記述を除き、ポジティブな記述の人数とネガティブな記述の人数について $\chi^2$ 検定をおこなった結果、展望高群においてのみ人数の差に有意な傾向が見られ、展望高群において、ポジティブな理由によって親の期待を感じてないと回答する者が多い傾向にあるという結果となった。Figure 4の結果では、展望高群だけがネガティブな語句との関連がない中間の語句だけで構成されており、親の期待を感じないことについてもポジティブに受け止めている可能性がある。その一方で、親の期待を感じない理由が「見守り系」のような信頼感や安心感を背景としていることから、高い展望を確立しやすくする可能性も考えられる。これらのことについては、Figure 4の親の期待を感じない理由と4つの時間的展望の共起ネットワークの展望高群に関係する語句に、ポジティブな語句である「切り開く」「全力」「道」などが使われ、将来に向けてコミットしていることを意味する内容が抽出されていることから、大学生にとって自己を確立することと関係の深いことが推定されよう。

今回の研究においては、対象となる人数が少ないという問題がある。今後、親の期待を感じないことの背景にはどのような要因があるのかの探究や、その差には何が影響しているのかについて、人数を増やして詳しく検討する必要があるだろう。また、今回は親の期待を感じない者の理由を分析してきたが、本研究の結果を親の期待を感じている者の理由との比較を通して再考する試みも重要であろう。

## 引用文献

- 樋口耕一・中村康則・周景龍 (2022). 動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング ナカニシヤ出版.
- 池田幸恭 (2009). 大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係 青年心理学研究, 21, 1-16.
- 石川茜恵 (2011). 大学生の時間的展望と他者の影響の認識の関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 20, 111.
- 伊藤忠弘 (2009). 大学生の親子関係の認知からの期待・プレッシャー経験 - 他者志向的動機づけを規定する要因の予備的分析 - 青山心理学研究, 9, 11-22.
- 今林俊一・野田百合香・迫田孝志 (2023). 大学生における親の期待に対する反応様式に関する研究 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 53, 33-52.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 - 創造性開発のために - 中央公論社.
- 河村照美 (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連 九州大学心理学研究, 4, 101-110.
- 木野泰伸 (2020). 概念化プロセスにおける質的研究手法とテキスト分析手法の比較 第11回横幹連合コンファレンス, [https://www.jstage.jst.go.jp/article/oukan/2020/0/2020\\_B-45/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/oukan/2020/0/2020_B-45/_pdf/-char/ja) (2023.9.9.)
- 長峰伸治 (2003). 親との葛藤から見たフリーター - 複数の事例による検討 - 現代のエス

プリ, 427, 105-115.

白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.

庄司知明・藤田尚文 (2000). 子どもから見た親の期待について - 親子関係診断尺度 (EICA) との関連から - 高知大学教育学部研究報告第2部, 59, 55-68.

牛澤賢二 (2021). やってみようテキストマイニング 増訂版 朝倉書店.

渡部雪子・新井邦二郎 (2008). 親の期待研究の動向と展望 筑波大学心理学研究, 36, 75-83.

## 謝 辞

本研究の調査を進めるにあたりましては、鹿児島大学の学生のみなさんに多大なるご協力をいただきました。厚く感謝して、ここにお礼申し上げます。

